

RAE2008に向けて：UKにおける研究評価事業  
翻訳「下院科学技術委員会 再審議」 「RAE2008申請の手引き」の解題と英国調査報告

Toward RAE2008 : Research Assessment Exercise in UK

岩田 末廣  
IWATA Suehiro

1. はじめに	137
2. RAE2008に向けての「初期決定」以後	137
2.1 「初期決定」の発表	137
2.2 下院・科学技術委員会の審議と報告	138
2.3 評価部会と副評価部会の決定と委員の募集	138
2.4 座長の決定と評価部会の手引きの公表	139
2.5 大学からの申請の手引き	139
2.6 「評価基準と作業手順」の決定	139
3. RAE 関係者への訪問調査	141
3.1 下院・科学技術委員会 書記 Shaw 氏	145
3.2 HEFCE RAE 担当 Ed Hughes 氏	145
3.3 大学協会 Hale 氏	147
3.4 Bristol 大化学科（化学科主任 A. Guy Orpen 教授, RAE 担当 Ken MacNeil 博士）	149
3.5 Jared Ruff 氏（Manchester 大 PREST）	150
3.6 サセックス（Sussex）大学化学科の閉鎖問題	151
4. 学科の統廃合と Full economic costs	152
4.1 大学における研究と教育の関係（質問17-22に関連して）	152
4.2 Full Economic Cost, FEC（質問29）	152
5. RAE2008以後に向けて	153
6. イギリスの RAE の正と負の教訓	154
7. 国立大学法人評価と機関別大学評価の中での研究活動評価	155
ABSTRACT	159

## RAE2008に向けて：UKにおける研究評価事業<sup>1</sup>

翻訳「下院科学技術委員会 再審議」[RAE2008申請の手引き]の解題と英国調査報告

岩田 末廣\*

### 要 旨

紀要3号掲載「2008年 RAE: 英国の高等教育財政カウンシルの初期決定」以後の RAE2008をめぐる動きを報告する。資料として本紀要に掲載している、この決定に関して開催された「下院科学技術委員会の審議」および財政カウンシル (HEFCE) が発表した「RAE2008申請の手引き」の翻訳の背景説明をしている。また、HEFCE において RAE2008を担当している Hughes 氏, 英国大学協会の書記 Hale 氏, 下院科学技術委員会書記 Shaw 氏など RAE2008の実務関係者との面接調査結果についても報告する。我が国の事情との関連にも簡単に触れる。

### キーワード

RAE2008, 英国大学研究評価, イングランド下院科学技術委員会, HEFCE, 英国大学協会, Unit of Assessment

## 1. はじめに

本報告では、英国の研究評価事業 (Research Assessment Exercise, RAE) をめぐる、2004年2月以降の動きと関連する諸文書の解題と、2006年3月に行った RAE に関する訪問調査について述べる。RAE2001の発表以後2004年までの動きは、資料とともに本紀要3号<sup>2</sup>に解説した。

## 2. RAE2008に向けての「初期決定」以後

### 2.1 「初期決定」の発表

2004年2月に UK の高等教育財政カウンシル<sup>3</sup>は、次回の RAE を2008年に実施すると発表し、その概要と時間表を明らかにした (文書 RAE01/2004)<sup>4</sup>。この文書の翻訳は、本紀要3号に「2008年 RAE: 英国の高等教育財政カウンシルの初期決定」(以後『初期決定』と省略する) とし

\* 広島大学 量子生命科学プロジェクト研究センター・理学研究科

<sup>1</sup> 本報告は、科学技術振興調整費 (2005年度) のプログラム「重要課題解決型研究等の推進」によって実施された、岡田益男東北大学教授を申請者とする「研究活動の活性化を志向した基礎研究評価のあり方」プロジェクトで報告したものに基いている。英国訪問はこの事業の一環として実施された。ご指導を頂いた岡田教授に深く感謝する。また、英国訪問調査に同行いただき、議論をしていただいた林隆之大学評価・学位授与機構助教授にも感謝する。

<sup>2</sup> 本報告と資料は、大学評価・学位授与機構の出版する紀要「大学評価研究」2号55-172 (2002) に掲載されている『英国の研究評価事業における評価部会の基準と作業手順—資料「RAE 文書5/99」の解説』と、同機構の紀要「大学評価・学位研究」3号131-136 (2004) 『RAE2001から RAE2008へ—「下院委員会報告」「ロバーツ報告」と「RAE2008」の解題』の継続で、第3部と見なすこともできる。

<sup>3</sup> Higher Education Funding Council for England (HEFCE), Scottish Higher Education Funding Council, Higher Education Funding Council for Wales および Department for Employment and Learning Northern Ireland が合同で RAE (研究評価事業) 関係の諸文書を出版している。以後、特別に断らない限り、HEFCE を総称代わりに使う。

<sup>4</sup> これらの文書は、RAE のホームページ (<http://www.rae.ac.uk/>) から取り寄せることが出来る。本報告は、訪問調査で聞き取った情報以外は、このホームページと下院科学技術委員会のホームページから取り寄せたものに基づいている。

て訳出している<sup>5</sup>。この文書には、2007年11月には各大学からの申請を受け、2008年に評価作業を行うことが記載されており、HEFCEはその後、この時間表にはほぼ沿って準備を進めて、2006年3月末に至っている。RAE2001発表以後「初期決定」の発表までのRAEをめぐる動きは、本紀要『RAE2001からRAE2008へ：「下院委員会報告」「ロバーツ報告」と「RAE2008」の解題』とその資料<sup>2</sup>を参考していただきたい。本報告では、この「初期決定」発表以後の動きを中心に記述する。

## 2.2 下院・科学技術委員会の審議と報告

下院の科学技術委員会は、HEFCEの初期決定を受ける形で、2004年5月12日と6月7日に公聴会を開き、また、文書による証言を集めている。この審議に基づいて、科学技術委員会は9月23日に、「2003-2004年会期第11報告書」として、公聴会の審議と文書による証言をふくむ詳細な報告書を出版した。この第11報告書のうち、「結論と勧告」を含む本文と「文書による証言」の一部を、資料1「RAE2008にむけて：HEFCEの初期決定に関する審議」として訳出した。公聴会における証人と委員との質疑にも大変興味あるやりとりと問題点の指摘もあるが、資料には含めていない。

この審議とそこでの証言では、基本的には、HEFCEの「初期決定」を追認しているが、いくつかの問題点も指摘している。ロバーツ委員会の提案や2001年の下院・科学技術委員会の報告に示された提言から採用されていない点については遺憾の意を示している部分もある。2006年3月末の時点でこの委員会の報告を読み直すと、この報告の影響力の大きさを見ることができる。2006年3月には、この文書の第77段落で提言している「2008年以降の研究評価代替モデルを作り上げるタイムテーブルを早期に作成」は、政府によって採用されることとなっている（4節参照）。2002年にRAE2001以後、RAEをどのようにするかを審議するロバーツ委員会の設置にも、この科学技術委員会の審議は大きな影響を与えていたことを

思い起こすと、この委員会の審議とその報告は、高等教育機関（HEI）をめぐる研究政策に多大な力を持っているようである<sup>6</sup>。

## 2.3 評価部会と副評価部会の決定と委員の募集

HEFCEは、2004年7月には、RAE2008年の評価組織単位（Unit of Assessment, UoA）を決定し、公表した（文書RAE03/2004）。この文書によれば、UoAは、AからOまでの15の主評価部会と67の副評価部会から構成されている。各主評価部会には、3から8の副評価部会が属している。その構成は、表1の第1, 2, 3列に示しておく。

主評価部会は、

- ・ 座長
- ・ 副評価部会の座長
- ・ 一人～二人の外国からの評価者
- ・ 可能かつ妥当な場合には、特別な分野の専門家や傍聴人

から構成される。副評価部会は、

- ・ 座長
- ・ 通常は15人を越えない評価員
- ・ ほとんどの場合において、一人以上の傍聴人から構成される。

また、この文書には、どのように、座長や評価員が決定されるか、外国からの評価者などを決定するのか、またその時間表も詳述されている。

RAE2001との大きな違いは、UoAに対する評価部会を主評価部会・副評価部会という構造にしたこととである。一つの主評価部会に属する副評価部会の個数は3から8とかなり幅があるが、類似の分野をまとめて、できるだけ共通の判断基準で評価作業が行われるように工夫されているようである。RAE2001の反省が反映している。

この文書には明記されていないが、訪問調査（3節）によると、各主評価部会には二人の書記がついて、主評価部会と副評価部会の世話をする。後にも述べるように、これらの書記は、大学でRAE関連の仕事の経験を持っている職員が臨時に勤める。ロバーツ委員会などRAE2001以後の審

<sup>5</sup> 『RAE2001からRAE2008へ：資料3 2008年RAE: 英国の高等教育財政カウンシルの初期決定』, 監訳岩田末廣, 大学評価・学位研究3号187-198 (2005)

<sup>6</sup> 『RAE2001からRAE2008へ：資料1 UK下院 科学・技術委員会2002年第2報告 (RAE2001に関して) の要約および提言と結論』, 監訳岩田末廣, 大学評価・学位研究3号137-144 (2005)

議の中で、評価部会の評価員の負担軽減の意味でも、評価部会を支援する事務組織の強化が謳われていたことに対応する処置である。それにしても、8副評価部会をもつ主評価部会の議長と書記の激務ぶりが予想される。

ロバーツ報告<sup>7</sup>で指摘されていた、主評価部会間の調整をする委員の制度は、この段階では、採用されていない。下院の委員会の質疑では、その可能性は否定されてはいなかったが。

## 2.4 座長の決定と評価部会の手引きの公表

主評価部会の座長は2004年の秋には決定され、2005年1月には各副評価部会の座長も公表され、2月には主評価部会と副評価部会の手引き書が出版された(RAE 01/2005)。この評価部会の手引きにおいて、「プロファイル」の作成方法の詳細が明らかになった。その詳細は、資料2「RAE2008申請の手引き」の付属書Aに記載してある。評価の最終報告は「プロファイル」と称されている「成績分布表」とでもいえる表形式にしたことは、従来のRAEと最も異なることと言える。

従来の評価の最終報告は、5\*, 5, 4, 3b, 3a, 2, 1という「階段」状であったのに対して、RAE2008では、4\*, 3\*, 2\*, 1\*, 該当なし、のそれぞれが何パーセント(5パーセント単位)であるかという、分布の形(これを「プロファイル」と呼ぶ)で判定され、発表される。評点が階段状であると、研究予算交付も階段状になり、極端な差が生じてしまっていたのを、プロファイル形式にすることによって、研究予算交付も「連続的」にしようという意図である。しかしながら、具体的に、どのような計算式を使うのかについては、下院委員会の中でも質疑があり、その報告書(資料1)でも指摘されているが、未だ明らかにはなっていない。

この手引きにおいて、プロファイルは、三つの要素について別々にプロファイルを作成し、それらに適切な重みをつけて平均して、作成されることが示されている。三つの要素は、「研究業績類(research outputs)」、「研究環境(research environment)」、「好評度指数(esteem indicators)」であり、その内容や重みは、主・副評価部会が決定することに

なる。

評価部会の評価員は、5月には公表され、ただちに、各主評価部会・副評価部会の作業が開始されたようで、早くも7月には各評価部会の「評価基準と作業手順(原案)」が発表され(RAE 04/2005)、これに対する諮問が開始されている。その締め切りは、2005年9月19日に設定されている。この締めきり後、この諮問の分析も行われ、その結果も公開されていて、UoA間で微妙に反響が異なり、その原因などの解析も興味ある。

## 2.5 大学からの申請の手引き

評価部会が「評価基準と作業手順(原案)」を作成していると同時に、評価の対象となる、各大学・学科における申請書の書き方、提出データなども決定され、資料2「申請の手引き」(RAE 03/2005)が6月に発表されている。RAE2001との違いは、その文節23にまとめられている。特に、Research active(被評価研究員、活研究者)の割合の記述がなくなっている。RAE2001では、教員の何パーセントをResearch activeとしたかを、A, B, C, で分類して、評価結果の公表の表に示されていた。申請学科が、どの程度、研究・教育の比率をおいているのか、あるいは、どの程度選別してResearch activeを選んでいるのかが分かる指標である。今回は、このような分類はしないが、文節23および35-37にも記載されているように、2000年人種関係(改正)法に基づく機会均等の監視義務のために、高等教育統計局(HESA)への個人スタッフ報告の中で、各大学で適格資格がありながらどの申請にもResearch activeとして含まれていない教員を、UoAの研究分野に振り分けることが求められており、それらのデータから総合して各大学の申請状況を推定できる。

プロファイルを三つの要素に分けて作成するのに伴い、提出データ(RA0-RA5)の定義や整理も行われている(資料2. 付属書E)。

## 2.6 「評価基準と作業手順」の決定

事前に予告されていたように、2006年1月末には、評価部会の「評価基準と作業手順」(RAE 01/2006)が発表された。主評価部会毎に一つの

<sup>7</sup> 『RAE2001からRAE2008へ：資料2 研究評価に関する審議』, 監訳岩田末廣, 大学評価・学位研究3号145-186(2005)

表1 プロファイル作成における重みにおける評価部会間の違い

主評価部会	UoA	UoA の名称	研究業績類	研究環境	好評度指数
A	1	循環医学	75	20	5
	2	ガン研究	75	20	5
	3	感染症と免疫学	75	20	5
	4	その他の病院ベースの臨床研究	75	20	5
	5	その他の研究施設ベースの臨床研究	75	20	5
B	6	疫学と公衆衛生	75	20	5
	7	医療サービスに関する研究	75	20	5
	8	プライマリケア並びにその他の地域基盤医療問題	75	20	5
	9	精神医学, 神経科学, 並びに臨床心理学	75	20	5
C	10	歯科学	70	25	5
	11	看護学並びに産科学	70	25	5
	12	医療の専門職と研究	70	25	5
	13	薬学	70	25	5
D	14	生物科学	75	20	5
	15	基礎医学並びに人間生物学	75	20	5
	16	農業, 獣医学, 食品科学	75	20	5
E	17	地球圏科学と環境科学	65	20	15
	18	化学	60	20	20
	19	物理学	60	20	20
F	20	純粋数学	70	20	10
	21	応用数学	70	20	10
	22	統計学とオペレーショナルリサーチ	70	20	10
	23	コンピュータ科学と情報学	70	20	10
G	24	電気及び電子工学	50	30	20
	25	工学一般, 並びに鉱物, 鉱山工学	50	30	20
	26	化学工学	50	30	20
	27	土木工学	50	30	20
	28	機械, 航空, 生産工学	50	30	20
	29	冶金学と材料学	50	30	20
H	30	建築学と人工環境	75	15	10
	31	都市農村計画	75	15	10
	32	地理学と環境研究	75	15	10
	33	考古学	75	15	10
I	34	経済学と計量経済学	70	20	10
	35	会計学と財政学	70	20	10
	36	ビジネスと経営研究	70	20	10
	37	図書館と情報管理	70	20	10
J	38	法学	75	20	5
	39	政治学と国際研究	75	20	5
	40	社会福祉学と社会政策, 行政学	75	20	5
	41	社会学	75	20	5
	42	人類学	75	20	5
	43	開発問題研究	75	20	5
K	44	心理学	70	20	10
	45	教育学	70	20	10
	46	スポーツ関連研究	70	20	10
L	47	アメリカ研究並びに英語圏に関する研究	75	15	10
	48	中東及びアフリカ研究	75	15	10
	49	アジア研究	75	15	10
	50	ヨーロッパ研究	75	15	10
M	51	ロシア, スラヴォニア, 東ヨーロッパ言語	75	20	5
	52	フランス語	75	20	5
	53	ドイツ, オランダ, スカンディナヴィア言語	75	20	5
	54	イタリア語	75	20	5
	55	イベリア, ラテンアメリカ言語	75	20	5
	56	ケルト研究	75	20	5
	57	英語学と英文学	75	20	5
	58	言語学	75	20	5
N	59	古典, 古代史, ビザンティン及び現代ギリシア語研究	80	15	5
	60	哲学	80	15	5
	61	神論学, 神学, 宗教研究	80	15	5
	62	史学	80	15	5
O	63	美術とデザイン	70	20	10
	64	美術史, 建築史, デザインの歴史	70	20	10
	65	劇, 舞踊, 舞台芸術	70	20	10
	66	コミュニケーション, 文化, メディアに関する研究	70	20	10
	67	音楽	70	20	10

pdfになっており、膨大な文書となっている<sup>8</sup>。

「評価基準と作業手順」は、RAE1996、RAE2001にも作成されているが、回を追う毎に、その記述は具体的で詳細になっている。過去の教訓を生かすことによって、基準や手順が精緻化されていることに対応していよう。

「評価基準と作業手順」には、各評価部会に共通な包括的記載に加えて、ほぼ共通な形式をもつが微妙に評価部会間で異なる評価の基準と作業手順が詳述されている。各研究分野の広さ、評価される研究業績類の量、予想される申請数、なによりも研究内容の特徴を反映して、評価基準の内容も作業の手順も違っている。一つの主評価部会の中の副評価部会間には、それほど大きな差は見られないが、それでも精読すると、明瞭な違いも見いだされる。

表1にみられるように、プロフィールを構成している三つの要素「研究業績類 (research outputs)」、「研究環境 (research environment)」、

「好評度指数 (esteem indicators)」の重み付けに、評価部会間に違いがはっきりと見られる。哲学や史学を含む主評価部会 N では、80%の重みを研究業績類の評価においており、研究活動の好評度指数には5%として、ほとんどプロフィール作成に考慮していない。一方、工学系 G では研究業績類の評価には、最終的プロフィール作成には50%の重みしかおいていない。学科が作っている(持っている)研究環境や学科(とその構成員)の好評度を評価すれば、その学科の研究活動の質の判断ができるという立場を取っている。実は、RAE2001の際から、工学系の評価部会の「評価基準と作業手順」には、研究活動の評価に際して、いろいろな要素にどのような重みをつけて判断するかを明記しており、ある意味では、「プロフィール法」を先取りしていた面がある。また、「研究環境」として判断する中身や、「好評度指数」とするデータも評価部会間で違いが見られる。

三つの要素毎にプロフィールを作成するのであるが、研究業績類については、提出された業績を「見て」判断し、その分布をプロフィールとするのであるから、作業自体は膨大ではあるが、手順

としては素直である。「作業手順 (working methods)」という節に、どのような手順でプロフィールを作成するか記載されているが、好評度指数 (esteem indicators) や研究環境のプロファイルの作り方はあまり明瞭ではない。多くの副評価部会で、好評度指数は個人単位で(たとえば、物理評価部会は研究グループ単位としているので、例外もある)判断し、その分布をプロフィールとするとしている。しかしその判断に用いるデータとして何をどのように使って判断するかはそれほど明確には説明されていない。さらに研究環境のプロファイルになると、判断に用いるデータ類は定義されていて、各申請に対して副評価部会の評価員が例えば二人当てられて原案を作ることにはなっているが、「プロフィール」に記載する分布の作り方を読み取ることが困難である。

### 3. RAE 関係者への訪問調査

2006年3月20日から23日にかけてUKのRAE関係者に訪問調査を行った。林隆之(大学評価・学位授与機構)助教授も同行した。訪問先は(訪問順)

- (a) 大学協会 政策助言者 (Policies advisor)  
Chris Hale 氏
- (b) 下院・科学技術委員会 書記 (The clerk)  
Chris Shaw 氏
- (c) HEFCE RAE 管理者 (RAE manager)  
Ed Hughes 氏
- (d) ブリストル大学 化学科主任 A. Guy Orpen 教授, RAE 担当 Ken MacNeil 博士
- (e) マンチェスター大学 PREST Jared Ruff 氏 (RAE2008の評価部会 F の書記に就任している)

である。他に、Imperial College London の化学科 M. Robb 教授(大学の物理科学系 RAE 申請の政策に関与)、ブリストル大学化学科の G. Bulint-Kurti 教授、マンチェスター大学光子科学研究所所長 K. Muller-Dethlef 教授からも意見を伺った。

訪問に当たって事前に表2の質問票を送付しておいた。訪問者の知識程度や関心ある課題などの理解の助けにもなると思い、全員に同じ質問票を

<sup>8</sup> いくつかの主評価部会と副評価部会の「評価基準と作業手順」の翻訳を進めており、大学評価・学位授与機構の紀要「大学評価・学位研究」の次号に資料として出版する予定である。

表2 質問項目<sup>9</sup> (2006年3月 UK 訪問調査における)<sup>10</sup>

番号	主な相手	英文	翻訳
1	S	How did you decide the session for a particular subject for Science and Technology Committee (STC)? We are so impressed with the quick decision to have the session for RAE2001 in January 2002. It seems that the session is well prepared. In retrospect, the role of that session was so important in the whole process of the review for RAE2001.	どのように、ある特別な課題について、科学技術委員会を開催することを決めるのか。RAE2001年の結果が2001年12月に発表されてその直後の2002年1月には、よく準備した委員会が開かれたことに、強い印象を受けました。今から見ると、この委員会は、その後のRAE2001審議全体の中で重要な役割を果たしたとおもいますが。
2	S	Who does write the draft and final versions of the "report"? Do you hire temporal staffs or consultants for a particular report?	どなたが、委員会報告の原案や最終版を書かれるのですか？ある課題の報告書のために、特別なスタッフや顧問を雇うのですか？
3	S	Have some of the committee members any academic experience? Some of them look very well informed on the research in the universities.	委員会の委員の中には、大学教員の経験ある方がおられるのですか？何人かの方は大学の事情に大変詳しい印象を受けます。
4	S	The result of RAE is a kind of the public announcement of the research activity of the departments in HEL. In that sense, RAE plays a role of the accountability to the taxpayers. Is this correct? In addition to the policy making, it seems that a part of the role of the STC is the "accountability". Is this correct?	RAEの結果の公表は、高等教育機関の各学科などの研究活動に関するある種の一般公開のように思われます。RAEの役割の中には、国民に対する説明責任もあると考えて良いのでしょうか？科学技術委員会でのこのような審議をすることの意味の一部には、説明責任もあると考えて良いのでしょうか？
5	H	How is the quality profile used for the real funding (Funding mechanism after RAE2008)? When and how is it decided? We know this is a repeated question, but is there any principle that is already established?	質のプロファイルは、RAE2008後に、研究予算交付にどのように使われるのでしょうか？いつ、どのようにそれは決められるのですか？いろいろな場所でこの質問は繰り返されているのは存じ上げていますが、すでに確立している原則のようなものはあるのでしょうか？
6	H	The weights for three elements (research outputs, research environment, and esteem indicators) are so different among the panels. One of the plausible causes of this difference is the existence of some kinds of indicators. The other might be related to the number of outputs (research actives) which the sub-panel (panel) has to examine. Are they correct?	プロファイルの三つの要素(研究業績類, 研究環境, 好評度指数)の重みは評価部会間で大きな差があります。この違いの原因は研究分野によっては適当な指標があるからではありませんか？他の原因としては、評価しなければならぬ研究業績の数にも関係しているようにも思われますが、いかがでしょう。
7	H	To make a profile for "research outputs" is straightforward by examining the submitted outputs and by summing up the rating for them. But the profiles for research environment and esteem indicators seem to be difficult to make. After reading some of "Panel criteria and working methods", it is not clear how to judge what percentages are for 4*, 3*, 2* and 1*. Most of the items to be assessed are more or less qualitative.	研究業績に対するプロファイルの作成には、提出された業績を見て、採点をし、統計を取れば良いので、分かりやすいのですが、研究環境や好評度指数のプロファイルを作るのは難しそうに思えますが、いかがでしょう。4*, 3*, 2*, 1*の分布をパーセントで表す方法がはっきりしません。評価の対象は、多かれ少なかれ定性的で、性格も違って分布を取りにくいように思えますが。
8	H	We do remember that in RAE2001 "Panel criteria and working methods" of the panels for engineering UoAs explicitly stated the weights of the elements in their judgment as [12]. This time Panel G for engineering gives the lowest weight to the research output. The two facts are inter-related to each other, isn't it?	RAE2001でも工学系の評価部会の基準と作業手順において、要素に重みをつけていました。このことと、RAE2008の評価部会Gが研究業績に一番低いパーセントを与え、他の二つの要素に他と比べて高い重みを与えているのとは関係あるのではないのでしょうか？

<sup>9</sup> この訪問調査は、2006年3月20日から24日にかけて、岩田末廣(広島大学)と林隆之(大学評価・学位授与機構)が行った。

<sup>10</sup> 質問項目を訪問に際して、訪問先に事前に送付した。主に質問したい相手だけでなく、質問者のRAEに関する知識レベルや興味の有り処を理解していただく意味もこめて、全員に同じ質問リストを送付することとした。

<sup>11</sup> S: 主に、下院・科学技術委員会書記官、クリス・ショウ(Chris Shaw)氏に対して。

D: 主に、大学でRAEを準備している方々へ。

H: 主に、HEFCEにおいてRAE2008を担当しているエド・ヒュー(Ed Hughes)氏に対して。

U: 主に、大学協会において政策担当をしているクリス・ヘイル(Chris Hale)氏に対して。

P: 主に、マンチェスター大学PRESTのLuke Georghiou教授に対して(急に出張が入り、会うことができなかった)。

<sup>12</sup> 例えば、部会22では、

研究業績の質に対して	30-50%	博士研究員の研究活動に対して	10-20%
外部資金団体からの好評度の証拠に対して	15-30%	学科の状況や元気さの証拠に対して	15-40%



9	H	Do you have a plan to have a training course for the members in the main panels and sub-panels?	主・副評価部会の評価員に、教育コースを用意する計画はありますか。
10	H	What happened for the “moderating mechanism” among the panels.?	主評価部会間の調整機構はどうなっていますか？
11	H	Have you estimated the number of departments and the number of “research actives” for each UoA?	各 UoA に申請される数をすでに見積もられていますか？
12	H	On the ratio of the eligible researchers and the research active, in RAE2001, each submission has to report the percentage of the research active by A to D. Is the same true in RAE2008? In the table of the profile, there is an item for the full-time equivalent staff submitted for the assessment. But not the percentage nor A-D.	RAE2001では、適格研究者に対する research active の割合が A から D の範囲で報告されていました。同じことを RAE2008ではしないのですか。プロフィール例の表には、FTE の人数を記入する欄がありますが、適格者に対する割合はありませんが。
13	H	Have you estimated how much work is required for the panel chair? In particular, for the chair of a large panel such as panels G, J and M.	各評価部会の座長の仕事量を見積もられましたか？特に、G, J, M のように大きい評価部会の座長の仕事量は膨大になるように見えますが。
14	H	What is the data collection system launched for use by HEIs? Do you cross-examine with the data of HESA?	各大学からデータ収集するシステムはどのようなものをお考えですか？ HESA のデータと整合性を調べられますか？
15	H	Are the results of RAE used by the “users” of the research outputs, by the local governments and by the charity funds?	RAE の公表結果は、業界、地方政府や民間の研究支援基金などによって、活用されていますか？
16	H	A little more details on the list of Annex 7 of “Panel criteria and working methods”	「評価部会の基準と作業手順」の付属書 7 のリストについて少し詳しく。
17	D, H, U	RAE has been changing the departmental structures in the university. Is this a part of the strategies of the government or of HEFCE? It may be directly related to the concern written at the last paragraph of the summary of the 11th report, STC 2003-2004.	RAE は大学内の学科構造を変えてきました。これは、政府あるいは HEFCE の政策の一部なのですか？学科構造の変化は、下院科学技術委員会の報告要旨の最後に書かれていることのように思えますが？
18	D, H, U	It does influence on the educational program for the undergraduate students, who have to have systematic teaching on basic science for each discipline. Who has to care of these trends?	この変化は、系統的な基礎科学教育を受けなければならない学部学生の教育プログラムに影響を与えます。これらの傾向を誰が監視しているのでしょうか。
19	D, H, U	I compared the correlation between the rating and the number of research active in a department for Chemistry and Physics (see the attached figure). It has a very strong correlation. Besides, the correlation becomes stronger in RAE2001 than in RAE1996. Is this trend continuing? Is it believed that the direction is appropriate in the higher education in UK?	図 1 は化学科と物理学科の research active 数と評点の相関を、RAE1996 と RAE2001 について比較したものです。強い相関は、RAE2001 ではいっそう強まっています。この傾向はまだ続くのでしょうか？ UK の高等教育において適切な傾向と考えられますか？
20	D, H, U	The closure of physical science departments is linked to the increasing selective funding based on RAE. Is it correct? The closure and reorganization of the departments are related not only to the research but also more directly to the education of those disciplines.	物理科学系学科の閉鎖は RAE に基づく研究予算交付選別性の増大と関係していませんか？学科の閉鎖や再編は、研究だけでなく、各分野の教育により強く関連しているように思えますが？
21	D, H, U	The game-playing has two aspects: one is the real “game-playing”, and the other is, you can say, that it is the national strategy of the HEI for the research. Is the strategy, adjusted to the rule for RAE, really good for promoting the research and education in UK?	RAE 申請における“戦略”には二つの面があるように思えます。一つは本当の戦略です。もう一面として、高等教育機関における国の政策の一部と見ることができるのではないですか？ RAE の方法に整合するように大学が政策を選択することが、UK の教育と研究を増進するのによく働いているのでしょうか？
22	D, H, U	How are the research funds being distributed now? The table is given in the 11 <sup>th</sup> report, STC 2003-2004. I have read an article which reported the introduction of 6* (?*) to give it to the departments which had 5* both at RAE2001 and RAE1996. But in the table, there is no entry of 6*. Was the plan given up?	RAE に基づく研究予算交付は、現在どうなっているのでしょうか？下院科学技術委員会の報告に示されている表の通りですか？ RAE1996 と RAE2001 の両方で 5* を得た学科を 6* とするという記事を読んだ記憶がありますが、結局はその案は採用されなかったのですか？
23	D, H, U	HEIGHER reported that some of the chairs of the panels in RAE2001 made a statement against the funding rate after RAE2001. What happened since then?	The Time の HIGHER は、RAE2001 の座長の一部が予算配分に関して声明を出したと報じていましたが、その後、どう発展したのでしょうか？

24	H, D, U	What is the “adventurous research”? I have read some of the abstracts of the proposals. The contents are so different; some are written in details but the other are so roughly sketching what the research group is thinking. Is this a sort of a substitution of 6*?	“冒険研究”というのは何ですか？いくつかの提案の要旨を読みましたが、そのスタイルには大きな差が見られました。すごく簡単なものから詳しいものまで。これは、6*の代替えではないのですか？
25	D, H, U	In RAE2001, there was the inconsistency in judging the rate among the panels (see the attached table). This difference is one of the reasons for the “inflation” of the rate, isn't it?	RAE2001では、評価部会間で評点の仕方が統一していなかったように見えます (表3)。この不統一が、評点の“インフレ”の原因の一つではないのでしょうか？
26	H, D, U	Can the panel works well? See the results of RAE2001 and RAE1996 for three UOAs in Panel E. The percentages of 5 and 5* in RAE2001 and RAE1996 are different among three sub-panels (previously four panels), and in particular, the time dependence is so different (see the attached table).	主評価部会制はうまく働きますか？評価部会Eに含まれている三つの副評価部会 (地球圏科学・環境科学、化学、物理) の過去2回の5と5*の割合を表3に整理してみました。分布が違うだけでなく、時間依存も異なります。
27	D, U	How do you create the data for RAE and for HESA? Does each HEI have their own database to prepare the input data for sending HESA and HEFCE?	各大学で RAE や HESA へ提出するデータはどのように作成していますか？各大学は独自のデータベースソフトウェアを持っているのですか？
28	D, U	Do you have any special divisions or committees to support RAE submission? Are there any systems in university to reduce the burden of RAE submission?	大学は各学科の RAE 申請を支援する特別な部門や委員会を持っていますか？また、その負荷を減らすためのシステムを持っていますか？
29	S, U	What does “full costs” mean in the context that Research Council should pay “full costs”?	研究カウンスルは “full cost” を支払うべきだと言っているときの “full cost” とは何ですか？
30	H, D, U, P	Do you think that RAE2008 will improve the research quality and research strategy in your university? (The initial effects of introduction of assessment has gone or still be working?)	RAR2008は大学の研究の質や研究政策の向上に資するところあると考えますか。RAE を導入した当初の効果はもうなくなっていますか、あるいはまだ続いていますか？
31	H, D, U, P	Possibility of the alternative method for RAE2014? It was discussed at STC.	下院の委員会で議論されていたように、RAE2014は別の形になりますか？
32	S, P	In UK, does RAE satisfy the accountability of the research in universities to tax payers?	RAE は、大学の研究の、税金を払っている国民に対する説明責任を満たすことになっていますか？
33	S, P	In Japan, the administrative officers in the Ministries are concerning about the impact of the research in universities on the national economy and “people's life”. How about in UK.	日本では、政府の役人は大学の研究が国の経済や日々の国民生活に与える効果を大変気にしております。UK ではいかがでしょう。
34	S, P	How do you assess the impact of STC on the decision making of RAE? Did the STC's report on RAE affect the RAE2008? If so, what kind of process realizes the impact?	RAE の各種決定に、下院の委員会が与える効果をどのように見ますか？下院委員会の報告は RAE2008に影響を与えましたか？どのような経緯でその影響が出てくるのでしょうか？
35	S, P	Are there any conflicts on the “philosophy” of block grant among many actors? (for example, Labour Party vs. Conservative Party, House of Lords vs. House of common, Congress vs. HEFCE vs. OST vs. universities)? Is the concentration of block grant (not project fund) supported by all actors? How is the balance between concentration and diversification considered?	各種の政府補助金に関して、様々な関係者の間に、哲学の違いがありますか (例えば、労働党対保守党、上院対下院、議会 / HEFCE / 科学技術庁 / 大学などの間)？ RAE に基づく研究予算交付のような政府補助金が集中して交付されることは、関係者に支持されていますか？集中と分散の均衡についてはどのように見られていますか？

表 3

分野	1996			2001		
	教員数	5* & 5 の学科のパーセント	申請学科数	教員数	5* & 5 の学科のパーセント	申請学科数
物理	1,516	51	55	1,668	79	50
化学	1,369	34	62	1,300	42	45
地球科学 a)		52	33		52	25
環境科学 a)		18	38		11	34
化学工学	331	40	22	294	55	17
電気 & 電子	1,204	33	65	863	69	45
金属 & 物質	466	43	38	402	49	30

a) RAE2008では、地球科学と環境科学に対応する UoA は一つになり、地球圏科学・環境科学 (Earth Systems and Environment Sciences) となり、物理 UoA, 化学 UoA と共に主評価部会 E を構成する。

電子メールで送った。なお、現在広島大学に客員教授として滞在しておられる K. Morgan 教授には Hale 氏と Hughes 氏を紹介していただくなど、いろいろな助言を頂いた。

各面談は1時間から1時間半ほどかけたが、必ずしも質問票にそって会話を進めることはできず、またすべてについて回答を得たわけでもなく、最も重要な欠陥として、当方の会話能力の欠如で十分正確には面談の結果を報告できないことをお断りしておく。にもかかわらず、大変有益な情報を得ることができた。以下で、岩田のコメント的な部分は、活字のポイントを一つ下げて記している。

### 3.1 下院・科学技術委員会 書記 Shaw 氏

質問1：委員会は常に6ヶ月ほどさきまでの予定を立てているが、毎週月曜日に公式の打合会有り、速やかに決定できるようになっている。

(Shaw 氏は2002年9月から今の地位についているので、2002年1月の事情の具体的なことは話せないが)、例えば、2週間前に報告があった Sussex 大学の化学科閉鎖に関しては(詳細には3.8項を参照)、先週の水曜日に急遽来週月曜に聴聞会を開くことを決めた。この会には大学と HEFCE から証言に呼んでいる。今回は、教育雇用省からの証言は求めていないが、今回で不満足な場合は、証言を求める場合もある(3.8に紹介する委員会報告参照)。多分、短い報告を書かなければならないだろう。

RAE2001以後の動きを見ていて、2002年1月の委員会の開催とその報告は、ロバーツ委員会の発足を含め、その後の RAE 審議に大きな影響を与えたと考えられたが、Shaw 氏も強い影響を与えたことに同意されていた。

質問2：委員会には6人のスタッフがおり、そのうち4人が“report watching”である。そのうち二人が(自分を含めて)シニア職員であり、議会の中でのキャリアオフィシャルで、いろいろな委員会を移動している。残りの二人は committee specialist と呼んでいるが、2、30代で科学者の経験をもち科学政策の専門家になった方たちで、任期付き雇用(2年+2年)になっている。この4人で報告書を書く。他に、技術的に特別な課題の際には、主に大学関係者から、時には産業界から顧問を契約する。そうするのは例外的で、RAEの報告書では顧問を依頼せずに、案の

段階から、この4人が報告書を執筆している。5年ぐらいの任期で停年になった方を相談員にお願いして、長期的な観点で助言を受けている。科学政策の専門家は、最近移動した例として、UK 研究カウンシルに移った例がある。ほとんどは、科学政策関連の職に移動している。

質問3：委員の中には化学者、生物科学、工学、医学の専門家もいる。前の議長は大学教員の経験があり、現議長は教員であった。委員は、科学者と非科学者が混じっている。下院には11人の科学者がいる。

議長が変わったと言うので、新議長のもと委員会の政策に変化があると予想されるかとの問いには、肯定的な返事であったが、委員の交代で産業界からの委員も加わったので、より工学的な問題に取り組むだろうとのことである。例えば、研究カウンシルの成果の知識移転が話題にあがっているとのことである。この問題は RAE とも関係している。知識移転への寄与を正當に評価することが RAE2008 では問題になっているからと指摘していた。

質問4：RAEの目的は、研究費を適切に配布することで、大学の説明責任とは関係はない。しかし、結果として大学が成果を示すと言うことでその役割は果たしているといえよう。政府には説明責任があるが、大学が公に対して説明責任があるという要求があるわけではない。委員会は確かに大学の決定を議論はするが、大学の自治に力点がある。

質問35：政党間に科学技術政策に関して意見の差があるとは思えない。選挙の争点にはなっていないかつ、下院と上院で意見が分かれているわけではない。

この問いにある程度関連するが、下院(委員会)と政府や HEFCE の力関係についての問いには、委員会には権限はないが(政府や HEFCE に対して)影響を与えることができる。いろいろな因子で影響力の強さは決まるが、なによりも優れた報告を發表することと話されていた。さらに、報告書発行後、2ヶ月以内に政府の対応について議論することになっているとのことである。

### 3.2 HEFCE RAE 担当 Ed Hughes 氏 (RAE 関係の諸文書の問い合わせ先になっている方。前職は City University, London とのこと)

質問5：質のプロファイルと予算配分の関係は、RAE 後に決定される。イングランド、スコットラ

ンド、ウェールズ、北アイルランドでRAEの結果を予算配分に反映させる仕方は少しずつ異なるし、事前に決定していることはない。HEFCEの予算の規模にもよるし、RAEの結果がどの程度選択度が高いのかにもよるので、事前には決定していない。以前のRAEでも決定していない。

以前でも確かに、最終的な配分方法は決まっていなかったが、計算式のおおよそ(評点が決まると比例係数が決定される)大学側は知っていた。今回はプロフィールの分布から「連続的」な配分をどうやって行うかが不明なので、繰り返し訊ねてみたが、答えを得ることはできなかった。

**質問6:** 評価部会に自由度を与えている。分野に依存している部分は評価部会に任せている。重みを事前に各評価部会が明らかにしているのは、全分野に共通な提出データのうち、どこに力点が置かれて評価されるのかを大学・学科が知っている必要があるからだ。工学系で研究収入をesteem indicators にいれているので、この重みが大きくなっている。

**質問7:** 大変興味ある問題である。各評価部会の基準書には、どんなデータ(文書によるものも含めて)を使って判断するかが記載されている。定量的なもの(例えば、研究環境に20%としている場合、研究学生に5%、研究収入の量に5%、研究収入のタイプに5%、研究政策に5%、とするなど)と定性的なものが混じり合っている。いくつかの副評価部会は困難なのでチャレンジングだとしている。100%を4\*あるいは100%を3\*ということもあり得るが、各学科には弱い面と強い面があるので、プロフィールにすることで、判断に自由度が増していると考えている。「基準書」に書いてある以上の詳細な情報は今後発表されることはない。確かに、評価部会間で記述の詳細さに違いはあるが。

**質問8:** 評価部会が調べなければならない研究業績類の数と、研究業績類に与えられる重みとの間には関係ない。RAE2001では、生物科学、史学、ビジネスマネジメント研究などで研究業績数が多かった。今回、これらは、研究業績数に高い重みをつけている。医学関係では、一つの機関が大きく、RAE2001では、一つの機関だけで1000を越える業績が申請された例もある。また、UoAによっては、100以上の組織からの申請があった。

RAE2001では、「基準書」に記載されている割合

以上に精読した業績の数は多く、今回もそうする評価部会が多いと予想される。今回は、そのため、評価部会の審議期間を前回より延ばすことによって、評価部会を支援している。前回は2001年4月1日が締めきりで、12月に結果の発表であったが、RAE2008年では締め切りが2007年末で、結果の発表は2008年12月になっている。

**評価部会の委員が査読する業績の取り寄せ方:** RAE2001では次のようなシステムを作った。評価員が自分で対象業績を見ることができない場合HEFCEのRAE支援チームに業績の取り寄せ依頼を出すと、RAEチームが大学に送付依頼する。各大学が業績の図書室的なものを作って置き、そこから3日以内にRAEチームに送り返す。RAEチームはそれを評価委員に送る。このシステムは複雑で手間も時間もかかる。Research activeの数がおおよそ50,000だから、おおよそ200,000業績が申請書に記載されており、そのうち40,000の業績がこのような手順で評価委員の手に渡った。おおよそ1/4の業績は印刷物の形でHEFCEに送られ、コピーが取られ、委員に送られた。今回は、on-demandシステムを作るつもりでいる。現在、雑誌などに出版されている論文類は固有なDOI(Digital Object Identifier)が割り当てられている。これは、webのURLのようなもので、この番号で論文を特定できる。現在、出版社のwebサイトから直接業績を読めるように、多くの出版社と交渉中である。今朝も、DOIを出版社に割り振っている会社と議論していたところである。大変議論のある問題であるが、70%が雑誌の論文であるので、実現できると効率が上がる。残りの30%は物理的に集めなければならないであろう。

**質問9:** 文字通りの意味では、評価委員に教育コースを用意してはいない。評価部会に対する手引き書は2005年始めに出版した。主評価部会には、書記を二人配置して、主・副評価部会を支援する。これらの書記は各大学で、管理者、多くの場合研究管理にたずさわっている経験豊かな人を雇用する。これらの書記を教育する。全体で30人の書記となる。このような形で、副評価部会間の統一を持たせる。言語の主評価部会は8副評価部会があるので膨大な仕事になる。

**質問25:** プロファイル方式の導入や主・副評価部会構造の導入、共通の書記の採用などで、一貫

性のある評価を行える。また、主評価部会の国際委員も一貫性を保証する。

**質問19：**必ずしも大きい学科が高い評点を取っているとは限らない。分野によるのではないか。

**質問13：**評価部会の議長は各所属機関でも重要な役割をしており、従って Full time job という訳にはいかない。また、tricky な問題としては、賃金を会議への出席や実際に行った仕事に対してしか委員に支払わないので、full time というわけにはいかない。ある意味では、委員の方々のコミュニティへのサービスである。

評価委員になったらその年は、大学で講義を受け持つ時間の余裕はないのではないかと質問に対しては、私がおの立場なら、学科の長と交渉して講義を免除してもらおうと、Hughes氏は答えていた。

**質問14：**データ収集システムは、HEFCEのスタッフで作成している。3人が開発にたずさわっており、さらにデータベース管理者が別にいる。今回は web base のシステムで、XMLスキームで、upload, download するシステムになる。自分たちで開発することにしたのは、RAE2001の際外部に依頼しようと調査したが、一回だけの利用で、かつ、失敗や保安に対する保険を考えると不可能なほど高価になってしまう。大学からの協力も得ている。大きな大学では、このシステムのミラーシステムとも言えるものを作っているところもある。XMLスキームの採用でそれが可能になる。

HESAのデータとは独立なものである。HEFCEは他の目的でHESAと契約してデータを受け取っている。RAEでは、データの確認を取るために使う。定義が完全に一致している訳ではないので、数字が一致しないだろうが、間違いの発見をすることができる。

**質問12：**RAE2001で行ったような research active の割合についてのデータを今回は集めない。しかし、HESAが適格者のうち research active に含まれていない人数をUoAの研究分野に分けて収集する。評価部会には、このデータを直接には渡さない。HESAのデータとRAEのデータを比較すれば計算できる。HEFCEは、research active の選択において、機会均等法上のどのような差別も行われていないことを確認するために、HESAのデータを活用する。この割合を集めなくしたのは、RAE2008の大きな変化の一つである。各大学・学

科は、それぞれスタッフに役割を分けているので、例えば教育を主にしている人の割合をRAEの評価には考慮すべきではないという考えに基づいている。

**質問22：**6\*は導入されなかった。予算配分の際問題になったのは、4の学科に配布された予算が少なかったことである。

**質問31：**もちろん、RAE2014をどうするか考えている。大学協会と協力している。しかし、大変難しい問題である。計量的方法で替えられるのではないかという意見もある。HEFCEがこれまでRAEのために集めているデータできちんとした評価をできるかということ、いろいろな問題がある。

**質問32：**ある意味ではそうだ。HEFCEは、政府に対して、研究費が妥当に使われているということに責任を持っている。

### 3.3 大学協会 Hale氏

126のすべての大学が大学協会に加盟している。大学協会は政策研究グループを作っている。ある意味では圧力団体とも言える。これらの委員会は、いろいろなタイプの大学を代表する人たちで構成している。

**質問17：**RAEは、研究の質の評価と資金額決定という分離できない二つの要素からなっている。

RAEは、大学へ研究資金額を決定するために行っている。しかし、RAEは予算配分だけではない。例えば、あまり大きくない大学では、5\*や5の学科を持つことによって高い評判を得て、優れた学生を引きつけるという意味もある。

政府がRAE2001を使ってどのように研究資金を配分するかということは政策的な意味で重要である。より選択的に予算配分をするという政策によって、大学の政策に影響を与えている。選別化が政府の政策で、HEFCEはそれを実施しているのだと思う。問題はどこまで選別化・集中化するかだ。現状は、ちょうどいいバランスのところにあると、私は考えている。最良の大学に配分しなければならないし、すべての大学に平等に配分することはできない。

RAEは、大学がより戦略的に考え、行動することを促し、より効率的に大学を運営し、また再構築することを許している。これは、RAEの間接的な利点といえる。大学は、独自に重点を判断す

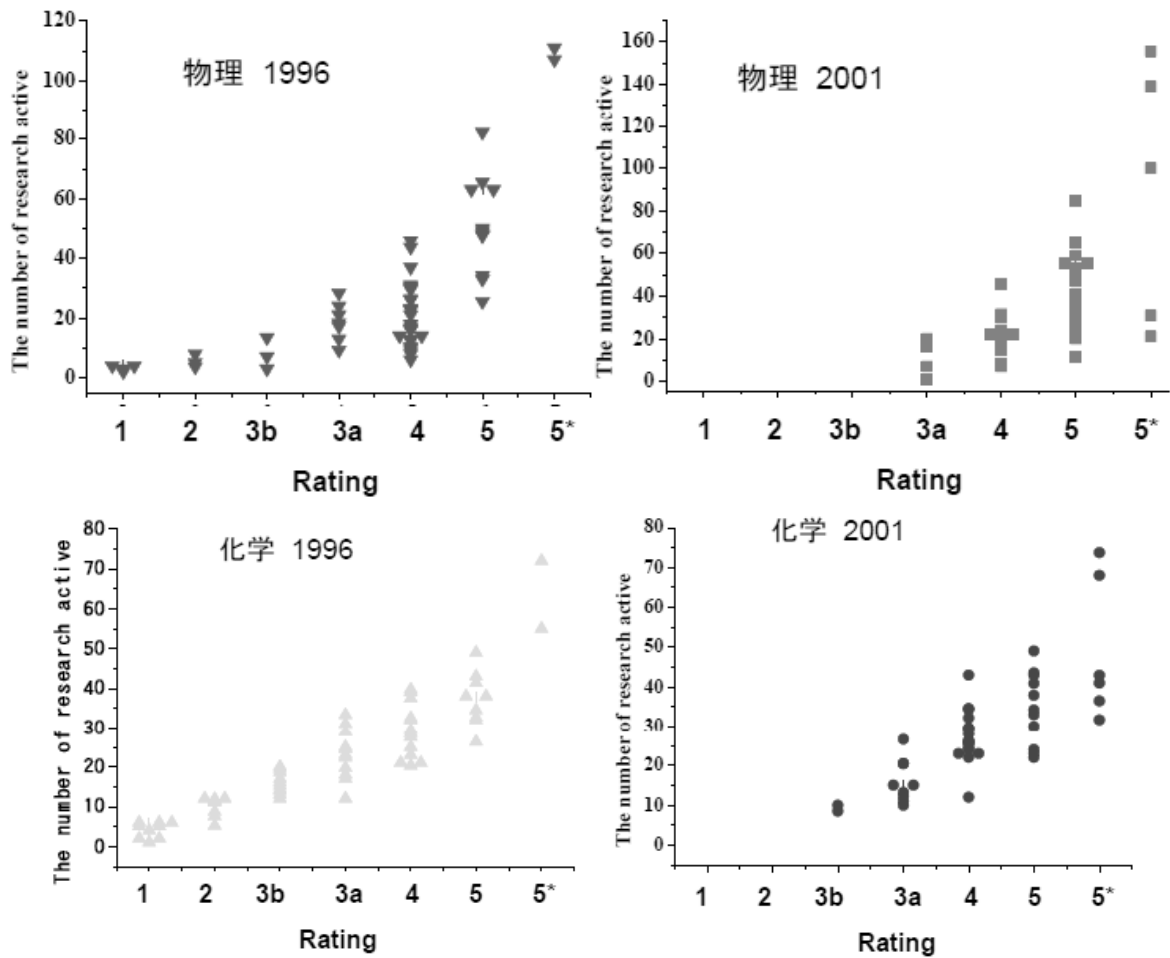
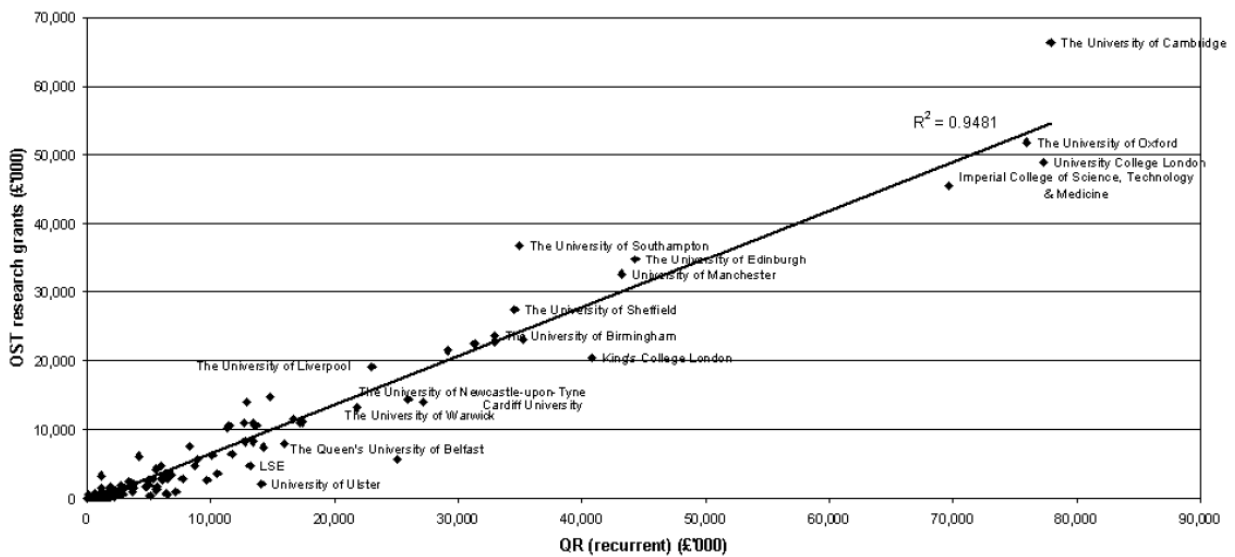


図1 評点と学科の規模の相関とその時間経過 物理学科と化学科

Graph 1: Comparison of QR research income and OST research grants, 2003-2004



横軸：QR（研究の質に関連づけられた研究費）とは、RAEの結果に応じて決定され交付された研究費  
 縦軸：OST（Office of Science and Technology）のプロジェクトによる研究費

図2 大学協会 Hale 氏より送られてきた図

ることができる。学長は最も効率的な再編成政策をとることができる。その際、RAEの結果を利用している。

**質問18：**教育と研究の関連については、UKでも大きな議論が行われた。教育・技能省のもとにSir Graeme Daviesを長とするForumが作られ、報告書が出ている（3.4参照）。research-informed teachingの重要性が議論されている。

**質問19：**図1に見られる傾向は、RAEによる資金支援の方式の結果といえる。研究費だけでなく教員も集中に向かっている。この傾向がさらに進むのは危険だろう。ちょうどいいバランスというのはその意味である。

**質問20：**イエス。Exeter大学の化学科の場合は研究費の問題であろう。しかしそれだけではない。入学希望する学生数が減っているという因子もある。いくつかの大学の化学科や物理学科が閉鎖されても、イングランドの中の他の大学で教育を受けられるのでそれほど問題はない。教員も他の大学に移ったり学科を変えたりしている。

Who careという点は、教育・技能省が広い観点で見ている。また、下院の科学技術委員会でその問題を議論して報告書を出版している（3.4参照）。これは大変良い報告で、我々はその結論に同意している。大学の再編成の必要性を述べている。

**質問21：**個人的見解だが、game-playingはどんなシステムにも伴うものだと思う。規則に整合するようになる。意図されたものもあるが、意図されていないものもある。新しく教員になった若い人をresearch activeから外すようなことは後者の例であろう。新しいRAE2008ではこのようなことはないようになっている。

**質問22：**6\*は放棄された。

**質問29：**近年、研究カウンスル、EUやその他のプロジェクト型の研究費、特にWelcome Trust等の財団(Charity)からの研究費が、QR(研究の質の評価に関連づけられた、Quality-related)研究交付金の増大を上回る勢いで増大した。この不均衡のために、前者が研究遂行に関連する全経費(Full economic costs)を必ずしも満たしていないために、機関の持続可能性が問題になって、議論が進んでいる。関連する文書をお渡しする(3.5参照)。

**質問25, 26：**これらの図や表は、興味ある。こ

のような図や表の例をしらない。HEFCEがどう反応するか興味ある。我々はRAEの結果を認めている。新しいRAEでは、評価部会間で一貫性を保つようになっている。

【こういうあからさまな質問をするのには、正直いって躊躇したが、外部だからできたのだらうと思ひ、あえて質問事項に加えた(岩田)】

**質問27：**各大学はデータベースを持っている。HESA, HEFCEにデータを提供することが要請されている。RAEと関連し、各大学はデータに基づいて戦略を作る。大きな大学ではデータを解析する専門チームもいる。

**質問31：**下院の委員会では、「RAE2008を支持する。しかし、次のRAEについても検討を始めなければいけない」といっている。HEFCEは、公式的には、考えていないというだろうが、非公式には検討しているはず。我々も小さい委員会をつくって考えている。今のところはまったく“学術的”である。特別なモデルを考えている訳ではなく、いろんな可能性を検討している。来週にもその委員会がある。図2が示すように、RAEに基づく交付金(横軸)と科学技術庁(OST)のプロジェクト研究費は相関の強いことを示している。数量的指標に基づく方法を示唆している。この相関はある大学には適用できるが別の大学には適用できない。図自身大きなノイズが見られる。ある研究分野では強い相関があるが、別の分野では相関が弱い場合がある。6年サイクルも検討している。中間期にミニRAEがあり得るかどうかも検討課題である。この小委員会は、報告を多分に5月に出版することになるだろう(5節に記載するように、私たちが訪問調査を行っている時に、RAE2008は、このような形の研究評価の最後になるという決定を公表している)

### 3.4 Bristol大化学科 (化学科主任 A. Guy Orpen教授, RAE担当 Ken MacNeil博士)

【質問20に関連して、ここでもSussex大学化学科の閉鎖が話題になり、Orpen教授は「各研究分野の増減に、(HEFCEには)戦略なんか無い」、「HEFCEは学科の閉鎖に関して責任がないと思っている」と述べられている。質問19と関連しては、教員が多ければ、教育の負担が少なくなり、研究に専念できる時間が増えて、結果として成果が上がるという面を指摘している。また、2008年には、物

理や化学では、もっと少ない申請になると予想している<sup>13</sup>。】

“game-playing”に関しては、馬鹿げた面と同時に重要な面がある。この大学では我々が達成しなければならないことに人々の関心を集めさせた。この目的はほとんど完了している。化学科に関しては何に投資しなければならないか明確にできた。RAEの評点方法がprofile方式に変更されたことにより、game-playingの中身が変わり、「より合理的」になろう。

「作業手順」に関する諮問の際には、すべての化学科主任を集めた会議が開かれ、評価部会の議長が詳細に説明した。プロフィールの重みや提出する業績の数など議論した。しかし、議論によって手順書はあんまり変わらなかった。

質問22：6\*とは呼ばずに、最良の5\* (best 5\*)と言っている。Bristol大の化学科はRAE2001で5\*を取ったが、「最良の5\*」とは差別を受けている。大きいところはボーナスを得たが、小さくてよりがんばっているところにはそれが無い。公表されている配分金額を調べればこのことはわかる。

質問23：Adventurous researchは、EPRS (Engineering Physical Research Science) カウンシルの研究費でRAEやHEFCEとは関係ない。国際的な委員会からの勧告によって作られた資金であり、文字通りの意図で作られている。当学科も取っている。研究カウンシルのうちEPRCのみあるプログラムである。

質問27：大学レベルでデータベースを持っている。化学科レベルで準備し、大学レベルのデータを検証する。HESAのデータは大学レベルで作っている。学科がRAEを申請する際、大学のCentral Research Officeが支援する。現在は、練習をしている段階で、化学科の準備したものを学内の他の学科の人が審査することを行っている。他の大学も同様なことをしている。化学科ではEsteem indicatorsに関連するデータは常に集めている。個々のスタッフがesteemをあげるのを推奨している。これは、RAEのためだけでなく、

Bristol大化学科のためでもある。

質問30：RAEは学科の研究について戦略的な立場で政策を検討する機会をあたえた。RAE1996もRAE2001もその役目を果たした。これは大変よいことだ。しかしこの利点はゆっくりと消えかけている。既にシステムができているのだから。研究費の配分額を決めるためのRAEは働いているが、研究を向上させるという意味では毎回効果は少なくなっている。

質問31：RAEが終わったときには、いつでも、これが最後だという話はある。RAE2008はRAE2001より負荷が高くなっている。評価部会の人数も増えている。評価部会に入っているすばらしい研究者が何ヶ月も研究をできないでいる。

教育の質を保証しているQAAは“light touch”になり、よりよくなったとおもう。Bristol大学も2年前QAAを受けた。いくつかの学科が選ばれてtouchされた。化学科もその一つであった。学科の選択は、基本的には最近QAAを受けていない分野である。QAAに選択権があるが、大学が自己評価書で良い実例の中に化学科が何回か登場し、QAAが我々を選ぶようにし向けたという面もある。

### 3.5 Jared Ruff氏 (Manchester大PREST)<sup>14</sup>

【Puff氏はPREST(Policy Research in Engineering, Science and Technology)の管理部門に属し、Manchester大学のSocial Science and Lawの研究Deanを支援している。RAE2001の申請を助けてきたという。また、RAE2008では、副評価部会Fの書記を務めており、その経験について話を聞くことができた。質問項目にそって答えていただく形になっていないが、副評価部会の状況や大学のRAEに対する対応を伺うことができた。】

Manchester大学に統合される前の人文系学部は、RAE2001に大変成功した。RAE2001以後、その結果を学内でUoAごとに外部委員を招いて、次のRAEに向けての大学の計画などを検討し、投資計画・人事計画などの勧告を受けている。次のRAEについていろいろ議論が進められている。Humanity関連のFacultyはRAE2001では13件申

<sup>13</sup> 同様の予言を、2002年夏、Birmingham大学化学科学科長から聞いている。彼は、RAE2001で4以下であったEnglandの化学科は閉鎖になるだろうと述べていた。

<sup>14</sup> 当初の予定では、PRESTの所長(director)であるLuke Georghiou教授とお会いすることができるはずであったが、EU関係の会議でブラッセルへの出張があり、代わりにRuff氏に話を伺うことになった。



請しているが、今回は合併の結果8評価部会に申請することを決めている。2006年は外部ではRAEについては何もないので、各大学にとって今年が重要な時になっている。この準備が、私の最も重要な仕事になっている。

去年は評価部会F(数学、計算科学など、表1参照)の書記(二人の内の一人)として、40日働いた(最終的にはこの間の給与はHEFCEが大学に保証した)。科学の経験をもってはいないが、2008年にも引き続いてFの書記を務めるはずだ。表3に示されているRAE2001の物理の結果については、去年の数学副評価部会でもある委員は皮肉の発言をしていた。2008年における書記の仕事は、Ed Hughesの仮定では、100%勤務になるか、90日の契約になるかどうかであろうとしている。まだ最終的な合意には至っていない。RAE2001年とは書記の役割が大きく変わっている。2001では、評価部会の委員自身がかかなり事務的な仕事をしてきたが、今回はそれらをすべて二人の書記が行う。4つの副評価部会の会合を準備し、それらに出席して、一貫性が保たれるようにもする。すべての書記は大学から来ている。彼らはおのの大学で私と同じ仕事をしている。大学の中で、研究を支援する部門が発展してきたのは最近のことだ。

現在、学内ではHumanity系では、8schoolがあるので、主評価部会ごとに分かれて、準備を進めている。次の申請に向けてのデータベースの作成をしている。各部門のresearch directorは2001年以後の各スタッフの業績などをみることができるよう仕組みを作っている。出版された論文に内部で評点をつけている(4\*の論文とか)<sup>15</sup>。今年、各schoolでは、外部peer審査を受ける。これは二つの目的を持っている。一つは、RAE2008に向けてであり、もう一つは、大学が掲げている長期プラン(2015年には、学生数、収入などを倍増する)に向けてである。RAEがなくても、この外部審査は計画されただろう。データベースに関しては、学生や研究収入のデータは大学全体で整理し

ている。部門でもデータベースを持っているが、HEFCEやHESAに報告するデータは、大学が送らなければならない。

Georghio教授の学問的な専門は、科学技術の国家政策であるが、大学ではAssociate dean of researchを務めている。次のRAE申請に責任を負っている。同時に、2015に向けての大学の計画達成に取り組んでいる。彼がここにおれば、大学の長期的な投資計画について説明したであろう。彼は50:50で自分の研究と大学の仕事をこなしている。Georghioは、国家レベルの政策の事情に通じているので、彼が大学の研究政策に強く関与しているのは大学に大きな寄与をしている。

### 3.6 サセックス(Sussex)大学化学科の閉鎖問題

今回の訪問調査中、最後の訪問先であったPREST以外で常に話題になったのは、サセックスSussex大学化学科の閉鎖問題であった。訪問者である岩田が化学研究者であったからではなく、ちょうど、大学関係者の注目を集めていたからである。既述したとおり(資料「下院科学技術委員会報告」、表2、3と図1参照)、物理科学系の学科の閉鎖・統合による数の減少は著しく目立っていた。化学では、Exeter, King's College London<sup>16</sup>, Queen Mary's London, Dundee, Surreyの各大学の化学科が閉鎖(あるいは統合)されている。Sussex大学の場合特に問題になったのは、この化学科での研究によって二人がノーベル賞を受賞している伝統も実力もある学科であったからであろう。C<sub>60</sub>の発見によってノーベル賞を受賞したKroto教授は最近フロリダ州立大学に移っているが、新聞に出ていた談話で、今後大学の宣伝に自分の名前を使うのを断ると述べ、閉鎖に強い反対の意見をのべられていた。

Sussex大学の場合も含めて、物理科学系の学科の閉鎖には、二つの理由が挙げられている。一つは、入学希望者の減少であり、もう一つは、財政的な面である。これらの問題は、科学・技術・

<sup>15</sup> 同様な話は、Bristol大学化学科の友人(教授)からも伺った。6報の論文の価値を説明する文書を提出して、同僚(lecturer)のコメントをもらう作業が今進んでいるとのことである。

<sup>16</sup> 今回の岩田の訪問先の一つであったImperial College Londonの化学科のRobb教授は、King's Collegeの化学科が閉鎖されたため、研究グループ全体で移動してきた方である。Robb教授は量子化学・光化学理論の分野で世界的な指導的役割を演じてきた方であるので、岩田の研究分野では、King's Collegeの化学科の閉鎖は、すぐに広まり、岩田の耳にも達していた。

工学・数学 (Science, Technology, Engineering and Mathematics, STEM) 関連の学科の閉鎖に関連して、下院の科学技術委員会が2004-2005年第8報告に「イギリスの大学における政策的科学供給 (Strategic Science Provision in English University)」で議論し、提言も行っている。学部・学科の閉鎖は、大学の自治に関連しており、HEFCE や教育雇用省、国会が関与する問題ではないと言うことが、下院委員会の報告にも強調されている。これに関連して、UK 大学協会の Shaw 氏は “back-seat driving” という言葉を使って、HEFCE や教育技能省が、間接的に、学科の閉鎖・統合によって集中を図っている可能性はあると話されていた。科学技術委員会は、Sussex 大学の学長と HEFCE の関係者を呼んで、3月末に Sussex 大学化学科閉鎖について議論をしている。

#### 4. 学科の統廃合と Full economic costs

##### 4.1 大学における研究と教育の関係 (質問17-22に関連して)

質問17-22では、図1と表3を示して、RAE が大学に学科の閉鎖・統合など組織変更をもたらし、結果として UK 全体の高等教育の構成 (分野や地域的な) などに偏りを与えてはいないか、政府はこのような結果をもたらす政策を意図しているのかということ、尋ねている。大学協会の Hale 氏は、政府と下院がそれぞれ関連する問題について検討している文書を教えてください。質問18で尋ねている “Who cares?” の回答としては、政府と議会という妥当な回答になる。特に、下院科学技術委員会の審議とその報告は、議会の関心とその質の高さを表している。

教育・技能省のもとに Sir Graeme Davies を長とする Forum が2004年1月から7月まで開かれ、「高等教育機関における研究と教育の関係」という報告を発表している<sup>17</sup>。この文書は、教育と研究の関係の一般論が整理されており、その上で、「この二つの要素を引き裂く圧力が強いから、きちんとした管理と明瞭な支援が必要」と述べている。具体的な提案としては、高等教育機関から

の簡単な戦略的な提案に基づいて “research-informed teaching” を維持する予算措置を勧告している。

下院の科学技術委員会の2004-2005会期第8報告<sup>18</sup>は、より質問事項と関連している。その序文には、委員会がこの調査を始める動機として、科学・技術・工学・数学 (Science, Technology, Engineering and Mathematics, STEM) 関係の学科の閉鎖が続いていることが記されている。この膨大な文書 (様々な組織からの情報・意見も含めて) をここに紹介することはできないが、一読に値する議論と資料が含まれている。この報告に対する政府の対応は、2005-2006会期第2報告になっている。この議論があって、3.8に紹介した Sussex 大学の化学科閉鎖問題が科学技術委員会で取り上げられているのである。

##### 4.2 Full Economic Cost, FEC (質問29)

Full cost という言葉は、下院委員会の質疑に現れている。研究カウンシルの研究費の内容と関連して Full cost という言葉が使われている。この言葉に関連して、大学協会の Hale 氏は、彼が、大学協会の内部資料としてまとめた「UK 高等教育における持続可能性と全経済コストの展開についての概要」という文書の提供を受けた<sup>19</sup>。この文書は以下のように要約される。

- ・ 背景には、近年、プロジェクト関連研究資金 (研究カウンシルだけでなく、民間財団、EU や産業界からの) の増大の速度が、RAE に基づく QR (研究の質の評価に関連づけられた、Quality-related) 研究交付金が増える速度を、著しく上回っている事態がある。この不均衡は、大学の組織の活動や基盤設備の持続可能性に、緊張感を与えている。さらに、研究遂行にかかる経費の明瞭なデータが存在しないために、多くの研究機関において研究などのプロジェクトに実際に費やしている経費を過小に見積もっており、結果として、歴史的に、多くの研究が実際にかかった費用以下で遂行されてきた。

<sup>17</sup> <http://www.dfes.gov.uk/hegateway/hereform/heresearchforum/index.cfm>

<sup>18</sup> <http://www.publications.parliament.uk/pa/cm200405/cmselect/cmsctech/cmsctech.htm>

<sup>19</sup> <http://www.jcpsg.ac.uk/download/guidance/Overview.pdf>

- ・ UKの大学における研究基盤にかかっているこの歪みを認識した上で、政府は、すべての面での財政支援面の不足をより明解に理解し、かつ公的財政支援に対する説明責任をより保証するために、“Transparency Review”を行った。その一環として、第1 TRAC (Transparent Approach to Costing) が導入され、sector-wide Costing and Pricing Steering Group (JCPSG)<sup>20</sup>によって実施された。TRACは1999年から始まり、2002年1月から2004年まで毎年実施されている。TRACによる各大学(機関)レベルでの経費に関する年次報告によると、機関が負っている経費は、研究費として受け取っている金額より多い。
- ・ TRACは次の段階に進みつつある。研究プロジェクト毎の全経費費用(Full Economic Costs, FEC)を含むように拡大されている。2005年7月から、すべての大学は、プロジェクト毎のFECを計算し、政府から(研究カウンシルを含む)のプロジェクト研究の経費を決め、財源提供者にその額を知らせている。
- ・ 大学は、持続可能な基盤に基づいた研究を管理するために、大学の長期戦略の一部として、次の5項を行うことが必要である。(1)研究プロジェクトのFECを確立し認識すること、(2)研究活動を戦略的に管理すること、(3)より適切な価格を研究プロジェクトに設定すること、(4)プロジェクト管理と費用回収を改善し、(5)研究プロジェクトの基盤整備に投資すること、
- ・ 持続可能な研究基盤を確立するための動きは、現在進行形であり、すべての研究資金提供者は、持続可能性の要請を認識し、それに努めることが重要である。

このような文書が作られ、大学協会の中で配布されていること自体にも、大変興味が引かれる。FECが、持続可能性(sustainability)の文脈から述べられているように、教員・職員の人件費のみならず、建物など基盤設備(infrastructure)全体も、FECの計算に入っている。日本で、「間接経費」といわれている経費の枠を遙かに越えるものが含まれている。このようなことが議論され実施される背景は理解できるものの、7でも述べるように、「全経費」が強調されすぎると、大学という組織の存在意義そのものに関わってくるのではない。

## 5. RAE2008以後に向けて

質問31と関連して、UK大学協会とHEFCEは、RAE2014に向けて新しい方策の検討を進めていると明言していた。ところが、ちょうど私たちがRAE関係者に面談しているその最中に、RAE2008後に向けて大きな動きが政府にあった。3月22日に財務大臣は、予算案と関連して、“Science and innovation investment framework 2004-2014: next step”<sup>21</sup>を発表した。その第4章では、RAE2008以後、2元支援システムの一翼を担っている「研究の質の評価とそれに基づいた(Quarity-related)資源配分の体制は、主に計量的な(metric-based)ものになるだろう」と結論づけている。そして、RAE2008を進めながら同時に、RAE2008後を目指して、政府は陰の計量評価(shadow metric exercise)を実行するとしている。第4章の最後の文節では、RAE2008への準備が現在進んでいるのを政府は承知しているが、もしUKの大学の圧倒的多数が支持するならば、新しい方式に早く移行することを検討してもよいと示唆もしている。RAE以後を検討する委員会のメンバーも公表されており、5月から10月に審議をすることが決まっている。下院科学技術委員会の書記Shaw氏からの連絡では、この件に関して4月24日に通産大臣を呼ぶことになっているそうであり、今後、

<sup>20</sup> <http://www.jcpsg.ac.hp/>

<sup>21</sup> この文書は [http://www.ost.gov.uk/policy/science\\_consult.htm](http://www.ost.gov.uk/policy/science_consult.htm) から取り寄せることができる。この文書は、2004年に発表された“Science and innovation investment framework 2004-2014”を補充しているものと考えられる。これらの文書は、大蔵省(HM Treasury)、通産省(Department of Trade and Industry)、教育技能省(Department of Education and Skills)、健康省(Department of Health)の連名によって発表されており、今回は大蔵大臣に相当するUK Chancellor, Gordon Brown氏が科学技術振興10年計画を補強する形で説明し、新聞紙上で大きく取り上げられている。特に、医学関係(Health Research)の増強を謳い、少なくとも毎年1,000,000,000ポンド(約2兆円)の研究費をつくることとそのため体制を論じている。

さらに議論が進むと予想される<sup>22,23</sup>。

## 6. イギリスの RAE の正と負の教訓

本報告と参考文献2において、イギリス連合王国 (United Kingdom, UK) の大学における研究に対する評価事業 (Research Assessment Exercise, RAE) を追ってきた。1989年以来、92年、96年、2001年と回を重ね、現在各大学は RAE2008年に向けて、準備に忙しい。そして、高等教育財政カウンシル (HEFCE) による RAE は、RAE2008以後大きく姿を変えるようである (5 参照)。RAE2001を準備する過程から、特に web を通じて諸文献を入手して知識を得てきたが、政府や HEFCE はかなり意図的に、研究評価作業の透明性 (transparency) と公開性 (openness) を維持するのに努めている。重要な決定に関しては、期間に余裕のある諮問 (consultation) を行っており、この諮問には、大学・学科・学協会や個人が応じている<sup>24</sup>。

特に、下院の科学技術委員会は、適切な時期に RAE と高等教育について審議し、勧告を発表している。この審議にも証人としてだけでなく文書による証言という形で、大学人と学協会からの意見が寄せられている。この委員会は政争に関係なく審議を行っており、勧告以後を追跡すると大変影響力があることが分かる。訪問調査によって明らかになったが、影響力ある報告書の作成には、委員会専任の4人の“Clerks”の存在が力を発揮している。

RAE2008まで20年間5回の RAE は、UK の大学の研究のみならず組織変更を含む大きな高等教育に影響を与えている。国から大学への財政二元系の一翼を担う経常費 (recurrent cost, あるいは Quality-related, QR とともに記述されることがある) が RAE の結果によって決まるのであるから当然と言える。RAE を語る時、この方式による財政

支援がもたらす大学の変化に特に注意しなければならない。RAE1996と RAE2001以後の経費の算出式は、 $RA * DS * RT$  という簡単なものである。RA はリサーチアクティブの人数、DS は研究分野別の重みで、ある年度では1.6, 1.3, 1.0と差がつけられていた。RT が RAE の評点によって決定される重みである。下院の委員会の報告 (資料1) によると、評点 (5\*, 5, 4, 3a, 3b, 2, 1) に対して、2001-2002年度の RT は (4.05, 3.375, 2.25, 1.50, 1.0, 0, 0) であったが、2004-2005年度では (3.362, 2.739, 1, 0, 0, 0, 0) になっている。以前から鋭い傾斜配分であったが、RAE2001の結果を使い始めて以来、その傾斜度は著しく鋭くなっている。この RT の値の変更が、基盤整備に費用のかかる理工系学科の閉鎖や統合の引き金になったといえる。政府の“Science and innovation investment frame work 2004-2014”と“Next steps”, 下院科学技術委員会の2004-2005年第8報告に見られるように (資料1参照)、理工系学科に関しては、歯止めを掛ける動きが見られている。そのための財政的な措置がどのようなものになるのが問題となろう。

Bristol 大学化学科科長 Orpen 教授が指摘しているように (3.4), RAE は、大学・学科に長期的な観点で戦略的に考え、行動する慣習をつけさせた。Manchester 大学でも同様なことが指摘された (3.5)。Orpen 教授は、RAE が果たすこの面の役割は、RAE2008ではより少なくなっていると述べている。Manchester 大でも、RAE2008の有無に関係なく長期的な戦略の検討が進められているという。

大学・学科レベルの意図的な政策は、別の立場から見ると、長期的に必ずしも好ましい結果をもたらさない場合もあろう。学科の閉鎖・統合がその良い例であろう。教員を含むスタッフの移動が極端に進み、一部の大学への過度な集中をもたら

<sup>22</sup> 今回お会いできなかった Manchester 大学 PREST の所長 Luke Georghoon 教授は、彼が発表した“Research Fortnight”に書かれたコメントを送って下さったが、その中で、“Next Step”の記述の問題点を多く指摘しておられる。

<sup>23</sup> この文書“Next step”には、他にも多くの興味ある記載がある。第6章は「科学者の供給の改善 (improving the supply of scientists)」であり、その中で、3.8で紹介した STEM の目標学生数を明記している。A 水準の学生を物理学で24,200から35,000に、化学では33,000から37,000に、数学では46,168から56,000に増やすという具体的な記載もある。

<sup>24</sup> また、RAE の重要性和関連するのだろうが、私が学会などでお会いした個々の研究者も正確な情報を把握しておられる。我が国の大学の友人達は、研究科長などの経験者以外は、大学評価・学位授与機構の試行的評価事業や法人化後の大学法人評価および機関別認証評価について、ほとんど無知なのと対照的である。

さないかも、問題であろう<sup>25</sup>。Sussex 大学化学科の閉鎖問題は、ノーベル賞受賞者 Kroto 教授がフロリダ州立大学に異動した直後に起きている<sup>26</sup>。Kroto 教授なしで、RAE で高評価を得られないという判断が大学にあったと推測される<sup>27</sup>。大学内の組織改革の観点において、RAE で高評価を得る「学科（UOA への申請単位組織）」を作ることに力点が置かれ、学部学生への体系的な教育プログラムを提供する等への配慮が弱くなる面が指摘できる。“game-playing”の負の面は、評価結果を歪めるというだけでなく、大学内にも残すようだ。

財政二元系の一翼のもう一つを担う研究カウンシル等の研究プロジェクトによって大学に入ってくる研究費の増大は、RAE に基づいて大学に配分される費用（QR）の増大よりも大きく、科学技術庁（Office of Science and Technology, OST）の研究プロジェクト（研究カウンシルの研究プロジェクトはこれに含まれる）だけとの相関係数をとっても0.95にも達している（2の図2参照）。近年増大しているという財団（Charity）やEUからのプロジェクトから大学に入る研究費がこれに加わる。その結果、研究プロジェクト側が、大学を継続的に維持するための負担がある程度負わなければ大学運営に差し障りが生ずることになる。研究実施に際しての Full economic costs (FEC) をプロジェクト費用に含ませなければいけないという議論が下院の委員会でも行われている。4に報告したように、TRAC というシステムを導入して追跡調査を大学は行っている。FECに含まれる内容は、我が国の科学研究費で導入された「間接経費」の範囲をはるかに越えている。OSTからのプロジェクトの研究費にFECを含ませるのは、同じ国からの予算内なので、予算の配り方の方式と言えるが、国の予算外の財団などによる学術的な（財団などに直接的な利益をもたらすものではない）研究プロジェクトにまで一律に適応させることができるのか（考え方として）疑問が残る。大学はその使命の一つとして研究の遂行があるのだから、研究を実施する基盤設備の基礎は大学が責任を持つ必要があると思う。UK 大学協会の Hale 氏のメモ

(4)にはその観点がない。

RAE の経費は、その見積もりが困難であるが、政府の文書である“Science and innovation investment frame work 2004-2014”では5,600,000ポンド、“Science and innovation investment frame work 2004-2014: Next steps”では45,000,000ポンドとなっている。“RAE2008：高等教育財政カウンシルの初期決定”では、RAE2001における（HEFCE の）直接経費が、5,600,000ポンドであり、RAE2008では、これが、10,000,000ポンド（約2,100,000,000=21億円）になると予想している。これには、大学がRAE申請にかける経費は含まれていない。“Next steps”に記載されている数字は大学などの間接経費を含んだ見積もりなのかもしれない。ともかくも、巨額な経費と労力をかけてRAEを実施している。2008年以降RAEを大幅に変更する理由の一つにこの問題が指摘されている。

## 7. 国立大学法人評価と機関別大学評価 の中での研究活動評価

UK の RAE は、外から見ると、「壮大な実験」とも見る事ができる。20年間にわたるこの事業を様々な面から検討することは、我が国の大学における研究活動の評価と研究活動の改善に有益である。多くの学ぶべき点もあるが、同時に、「実験」によって得られた負の成果を直視しなければならない。なによりも、大学（高等教育機関）の歴史も体制も全く異なっている。国立大学が法人化されたことにより、国立大学の地位がUKの大学に類似してきたことは確かである。しかし、日本の文部科学省と国立大学法人の関係は、イングランドの教育・技能省と大学の関係に比べて、いまだ圧倒的に強い。

なによりも学ばなければならないと私が思うのは、その transparency と openness である。かなり長い期間をかけて準備して、大学・学協会からの意見を時間かけて諮問しているところも重要である。文部科学省に国立大学法人評価委員会が設置され、また、中期目標単位で実施される法人評価の中で、教育・研究に関わる評価を実施する大

<sup>25</sup> 親しい友人の二人は、“RAEがあったから、このポジションの提案があった”と私に説明している。

<sup>26</sup> USAでは年齢による制限がないことが移動の大きな理由と推測できる。

<sup>27</sup> 他大学の友人との会話のなかにおける指摘。

学評価・学位授与機構でも、委員会が審議を進めていることも報告されている。RAEの経緯においても、また、大学評価・学位授与機構が2001年以降4年間に実施した試行評価事業においても、各大学における評価を受ける準備期間が各大学の様々な改革に寄与するところが大きいことが明らかになっている。その意味からも、評価委員会はできる限り早い時期に、評価方法案を公開し、各方面に諮問をすることが期待されている。

機関別大学認証評価においては、大学評価・学位授与機構の基準書では「選択的評価基準A 研究活動の状況」が取り上げられている。ここでは、研究の実施・支援・推進体制と、研究活動の適切さとその成果が評価される。研究成果に関しては、個々の研究業績に当たることはしないようで、研究成果の発表状況の評価に加えて、RAE2008でいう「好評度指標」「研究環境」に対応する評価となっており、いわゆる“light touch”といえる。といっても、この評価を受けるには、後に述べる根拠資料を作るデータベースの整備を日頃から進めていなければ、過度な準備作業が大学に課せられることになる。また、根拠資料の検証が評価側にも必要となり、両者に適切なデータベースの準備が欠かせない。

問題は、国立大学法人評価の中で、研究成果(業績)をどのように評価するかであろう。「試行的評価」における「分野別研究評価」では、年によりまた分野により程度の差はあったけれども、「2 研究内容及び水準」「3 研究の社会(社会・経済・文化)的効果」の評価では個々の業績にあたり、個人別に4段階(3項については3段階)の判定をした上で、評価報告ではその分布のみを記すという方法をとっていた。RAE2008のプロファイルに類似した表現方法である。例外的に、「総合科学」では「プロジェクト」単位の評価とその分布にしている。いずれにしろ、提出された業績にあたって個人(プロジェクト)の水準を判定している。試行的評価の経験でも、またRAEの例でも、個々の業績単位や個人単位の評価を国レベルで実施するには、膨大な資源と労力が必要となる。一方、個々人の研究評価に関しては、文部科学省における「研究及び開発に関する評価指針」の「3.4 研究者等の業績評価」によると、「研究者等が所属する機関の長が機関の設置目的に等

に照らして、評価時期を含め、適切かつ効率的な評価のルールを整備して、責任をもって実施することになっている。人事権をもっている機関の長に責任があるのは当然と言える。組織・機関の研究活動の評価のためには、この指針に沿って、個々の業績単位や個人単位の評価はその組織・機関に責任をもたせ、むしろ、「評価のルールを整備して、実施している」ことをその中身にまで踏み込んで審査することが必要なのである。今、大学や研究所、研究科・専攻などで、内部・外部評価の一環として個人単位の評価を実施しているところはまだ限られている。研究科内はもちろん専攻の中でも、研究活動の評価はほとんど行われていない。RAEが学科や大学に与えた大きな影響の一つは、RAEへ申請する単位の長が、所属するスタッフの研究活動を監視し、その質を判断することに努めるようになったことであろう。大学の研究活動の改善には(それは、教育活動の改善にもつながるが)、外部からの評価のための自己評価ではなく、その組織を発展させるための自己評価の実施が必要なのである。

RAEの主目的(あるいは唯一の目的)は、財源配分である。RAEの結果によって公正かつ効率的に研究費用を大学に配分していることが、国民に対する説明責任を果たしているというのがHEFCEの立場である。しかし、長期的には、高等教育に歪みももたらしている。評価事業は、たとえそれが財源配分と結びつかなくても、対象機関・組織に影響を与える。その影響は、単に「振る舞い」的な面だけでなく、構造的な変更も引き起こす。ある程度、その影響を予測して、評価事業の設計に当たらねばならない。RAEの歴史はその予測をある程度可能にする。国立大学法人評価、特にその中でも教育研究に関係する評価が、交付金にどのように結びつくかは、全く不明なので、外からは今予測は著しく困難ではある。評価と予算配分の関係づけ方によっては、近視眼的で、その場限りの学部、学科の統合・閉鎖が、UK同様に引き起こされる可能性は否定できない。日本では、学部の教育を担う組織と研究・研究者養成の大学院組織を少なくとも形式的には分離している大学が多くなっているため、研究評価に関係する組織変更によって、基礎的な学部教育への影響が少なくなる面も予想される。教育・研究評価

の単位や規模がどう決定されるかに依存する。

UKでは、大学への財政支援を二元系と言っているが、対応する日本の国立大学法人への国からの財政支援は、少なくとも二元系とは呼べないほど複雑である。国立大学法人評価後に、特に、中期目標期間が終わって次の周期に入ったとき、大学の予算がどのように決定されるのか、そこで法人評価の中の教育研究評価が関係するのかは、日本の高等教育の将来に大きな影響を与える。UKで下院の専門委員会がかなり重要なチェック機能を果たしているのと違い、残念ながら日本の国会の専門委員会にはその実力を持っていない。また、これも残念なことにジャーナリズムもその機能を果たしていないと断言できる実情から、大学と大学人自身とその関係機関（文部科学省を含めて）がその役割を果たさなければならない。近年、いろいろ問題がありながらも21COEとか「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、あるいは筆者が雇用されている科学技術振興調整費などのような通常の研究プロジェクトとは性格を異にする資金が大学に入ってきている。多くの問題を抱えながらも、大学における教育研究活動に変化をもたらせ、多様性を誘導するためにそれなりの役割を果たしている。これらの資金は多元性の一翼を担っていると言えよう。しかしながら、これらの資金は、大学の基盤整備にはあまり寄与しない。UKで起きている Full economic costs をめぐる議論が必要になる事態に陥らないためには、交付金の中に基本的な基盤整備の資金が含まれていなければならない。特に、理工農医系で、通常のプロジェクト研究では整備できない高価な機器や建物などの予算の確保がその教育と研究の維持および発展に不可欠となる。これらの資金配分を限られた資源の条件下で公明で効率的に行う仕組みとして、大学評価が機能できるか、どうすれば機能できるかが問題なのである。

研究活動の評価に限らず、根拠資料が重要な役割を果たしている。RAEでは、評価作業において対象とする提出データを詳しく定義している（資料2）。各大学は、大学レベル、学科レベルで最新のデータベースをもっており、RAEのみならずその他の政策決定に活用している。我が国でも、データベースの整備は進んでいるようであるが、大学間や学部・研究科・学科間の差は大きい。徳

島大学や大阪大学のように先進的なところもあるが、未整備やあるいは不完全なデータしか持っていないところが多い。研究活動の水準を「計量的」に知るには、RAEの「評価基準と作業手順」に記載されている「研究環境 (research environment)」「好評度指数 (esteem indicators)」の各項目が参考になる。これらのデータが日頃から常に最新のデータになっていることが、政策決定、様々な公募型プログラム・プロジェクトへの応募や自己評価のためにも重要であろう。

評価を効率よく、かつ評価する側にもされる側にも軽い負担 (light touch) にするには、国レベルでデータ項目の定義やその中身の質に一貫性のある根拠資料（データベース）が不可欠である。RAE2008の実施に際しては、HEFCEは独自のシステムを構築して、大学からのデータ収集を容易且つ確実にしようとしている。このデータはRAE2008にのみ使うことになっているようで公開されるものではないようである。UKの場合公開されるデータはHESAという機関が収集している。大学評価・学位授与機構でも、国立大学法人評価と関連してデータベースの整備を進めている。しかしながら、その利用は、RAEの場合と同様に、厳しい制限が付く可能性がある。その場合には、国立大学協会や大学基準協会が、公開できる一貫性のあるデータを整備する組織を作る必要がある。ジャーナリズムや民間の調査機関が時々行うランキングは、一部には「情報公開」の制度を使って精度のあるものも出てきたが、まだ、アンケートなどの方法によって得たデータに基づくものが多く等質の根拠データに基づいているとは言い難い例もある。自己評価や将来計画の作成には、他大学・研究科・専攻との適切な比較が欠かせないはずであるが、現在ではそれはほとんど不可能である。

「中央教育審議会」「新時代の大学院教育」（平成17年9月5日）の「理工農系WG報告」では、『6. 大学院評価の在り方』を取り上げ、「当面、学協会が中心となって専門分野別事後評価のシステム作りに取り組むことが必要である」と指摘している。JABEEの大学院版なのか、専門職大学院との関連で述べられているので、真意は不明であるが、大学院教育は、大学の研究活動と密接に関連しているため、国立大学法人評価の中で、研

究活動評価が、試行評価と同様に専門分野別毎に実施された場合には、その必要性が低くなろう。逆に、法人評価では、大学・研究科レベルの研究政策や研究活動とその支援体制中心に評価する場合には、このような専門分野別の大学院評価が高い価値を持ってくる。この際また重要になるのが、根拠資料として使う「評価作業に耐えうる」データベースの存在である。



[ABSTRACT]

Toward RAE2008 : Research Assessment Exercise in UK

IWATA Suehiro \*

The progress after the publication “Initial decisions by the UK funding bodies” by HEFCE is reviewed. Two documents, (1) “Research Assessment Exercise: A Re-assessment, Eleventh Report of Session 2003-04” by Science and Technology Committee, House of Common, and (2) “Guidance on Submissions, RAE03/2005” by HEFCE, are translated into Japanese, and their backgrounds are discussed. In addition, the interviews with the following people working for RAE2008 are reported: (1) Chris Hale, University UK, (2) Chris Shaw, STC of House of Common, (3) Ed Hughes, HEFCE, (4) Prof. Guy Orpen, Department of Chemistry, Bristol University, and (5) Jared Ruff, Manchester University. The relevance to the university assessment and evaluation in Japan is also briefly discussed.

---

\* Center for Quantum Life Sciences and Graduate School of Science, Hiroshima University, Specially Appointed Professor

